

横浜ユーラシア文化館開館 20 周年記念シンポジウム 「東アジアの帯金具と古代の日本」講演録

講演 4

渤海末期・契丹建国期の東アジア国際情勢

講師 澤本 光弘*

はじめに

渤海末期・契丹建国期の国際情勢について話してほしいとお声がけをいただきましたので、そのままのタイトルにいたしました。これまで岡田先生や小嶋先生、浜田先生もですが、帯金具について細かくお話されてきました。この穴太遺跡の帯金具は、かなりパンチのきいたものではありますが、なにぶん小さなものでございます。帯金具という小さなものを、国際情勢という大きなものと結びつけるのはちょっと釣り合いが取れないところがございます。そこで、その間を取り持つものとして、浜田先生が取り上げてきた裴瑒という使者について着目してみようと思います。浜田先生のご報告にもありましたが、裴瑒というのは3回にわたって来日しています。父の裴廻も882年と894年に来日し、菅原道真らと交流しております。裴瑒につきましては、907年に唐が滅んだ直後の翌年、908年に1回目、919年、これが帯金具と関係があるのではないかと言われている2回目、最後は東丹国として来た929年、渤海滅亡後になります。ですので、お手元のレジュメにはこの1回目の来日(図1)と2回目の来日(図2)、3回目の来日(図3)についての地図を掲げてあります。いただいた時間は40分ということですので、1回目の来日をだいたい10分ぐらい、2回目を10分、3回目を10分、最後、帯金具をめぐる国際情勢というものをだいたいお話すれば40分かと思っております。

1 唐末から五代十国の様相

まず、古代の日本に関心をもつ人からすれば、お手元にある3枚の地図というのはちょっと不満を抱く内容であると思います。古代の日本と言ってぜひ出てきてほしい巨大な帝国が出てこないわけですね。唐です。今回の帯金具には直接関係しませんが、古代日本と国際交流で唐が出てこないというのはどういうわけなんだということで、まず唐末のあたりから少しお話に入っていきたいと思います。

だいたい最後の遣唐使、承和の遣唐使というのが838年で、その後遣唐使というものは直接なくなりますが、たとえば渤海から日本への使者は何度か来ております。その間、唐はどうかといえますと、ここで見てほしいのは3つの反乱です。裘甫(きゅうほ)の乱、龐勛(ほうくん)の乱、黄巢の乱という反乱がたびたび起きております。ここで注意してほしいのですが、その反乱した勢力が従来の勢力に取ってかわったわけではありません。むしろその反乱軍を討伐した者が、皇帝周辺の勢力よりも力を持つようになったということが指摘できます。たとえば黄巢軍の討伐に活躍した者として李克用という人物がいます。また、黄巢軍を裏切って皇帝側についた人物として朱全忠——当時は朱温といいましたが——という人物、黄巢の残党を吸収した勢力として楊行密という勢力がいます。また、一時期四川の方に皇帝は逃れていたんですが、黄巢から逃れた皇帝を保護した人物として王建という人物が次第に勢力を持ててきます。黄巢の乱の直後にはもっと別の人物が勢力を持っていましたが、どんどん勢力図が変わって、だいたい900年代の頃にはこういう人たちが活躍するようになっていたということですので。

お手元に年表(図4)がありますが、だいたいこれからこの年表に書かれた30年というものを説明

*SAWAMOTO Mitsuhiro 早稲田大学朝鮮文化研究所
招聘研究員

していきます。30年を地図で説明してまいります、だいたいこの年表に書いてあるものですので、ちょっとコマ送りで急にはなりますが、どこかわからなくなった時にはこの年表に戻ってください。それではいきます。

2 裴瑋の1回目の来日

まず901年ですが、まだこの時は唐末でございます。この頃、勢力を持ってきた朱全忠と李克用が対立するようになって、この年には朱全忠が李克用を攻撃するという軍事行動が起きます。一方で都のあたりでは李茂貞という人物が鳳翔へ当時の皇帝昭宗——廟号ですがここでは昭宗と呼びます——を移動させるということが起きた年です。ここで注目してほしいのは、皇帝を握った人物が勢力を持つというルールが、この当時はまだ成り立っていた。この当時は都のそばにいた李茂貞という人物が、昭宗を自分の勢力範囲内に移動させることによって、自分の権力を高めようとしていた。そういうルールのもとで動いていたということをふまえておいてください。ただしこの李茂貞ですが、朱全忠と、また南の方にいた王建に挟まれて攻撃をされます。早くも李茂貞は朱全忠に降伏して勢力を失うのがその翌年(903)。また、南の方では楊行密というのが呉王という称号をもらって自立していく。呉というのは五代十国のうちの1国であります。すなわち唐が滅びる前から五代十国の国というのは、だんだん成立していったということをふまえておいてください。

次。先ほどは李茂貞という人物が皇帝を掌握していましたが、903年になると朱全忠が洛陽へ昭宗を移すという事件が起きます。同じルールで今度は朱全忠が皇帝を掌握するというのがこの頃、903年です。ところが、早くも904年に昭宗は殺害されてしまいます。朱全忠のさしがねです。こうした朱全忠の動きに対して、たとえば905年に北の耶律阿保機(やりつあほき)——契丹ですね、この時はまだ皇帝にはなってないんです——が、軍事行動を仕切っ

ていた関係で、南の方の李克用と会見をおこなって、一緒に朱全忠を討とうぜ、というような相談をします。これは実現しなかったんですが、朱全忠を包囲する勢力というのが動き出したのがこの頃です。906年には契丹の痕徳堇可汗(こんとくきんかがん)が没します。これによってほぼナンバー2であった耶律阿保機が即位する。それが907年。で、この時に唐が滅亡して、後梁が建国することになります。

この頃渤海が後梁に使者を派遣したということが知られています。これは『冊府元龜』に記述があります。元々この地図にその関係する『冊府元龜』や『旧唐書』、『旧五代史』等を全部史料載せてたんですけれども、ちょっと史料全部載せると耳なし芳一みたいな地図になってしまったので、史料は割愛しております。

そして、この唐が滅びた、そして耶律阿保機が即位したという時の翌年(908)に来たのが、裴瑋の1回目であるということが指摘できます。ただ注意してほしいんですけれども、原因→結果として、唐が滅んだから裴瑋が来たとか、契丹が強くなったから裴瑋が来た、みたいな言い方はちょっとしない方がいいとは思いますが。因果関係でとらえるよりも相関関係で見てほしいと。直接原因→結果とは言えないけれども、だいたい同時期に起こっているというぐらいの理解でいてほしいかと思います。

この朱全忠が後梁の太祖として即位すると、周りの銭鏐(せんりゅう)や王審知、馬殷、李克用、王建、李茂貞等々が互いに反後梁・反朱全忠包囲網というのを作り始めて、それぞれが独立してゆくというのがこの年になります。

3 裴瑋の2回目の来日

次に裴瑋の2度目の来日までの経緯を説明します。908年、李克用が没して子供の李存勖(りそんきよく)が後継者として地位に就きます。911年になると、幽州で劉守光というのが皇帝を名乗って燕を建国します。今の北京のあたりですね。こうした

変化があるにもかかわらず、後梁では朱全忠が義理の子供の朱友珪に討たれ、さらに朱友貞が兄の朱友珪を討って、次々と皇帝が代わるという事態が続き、何も対処できません。すると914年、幽州を支配していた劉仁恭と劉守光親子は李存勖によって討たれ、北京のあたりは李存勖の支配下に入ります。

こうした中、勢力を拡張したのが契丹です。915年には、耶律阿保機が鴨緑江のあたりで釣りをしたという記述が見られます。これは本当なのかなというところもあるんですが、契丹は一時的に遠くまで馬で進軍してはまた立ち去るということを重ねているので、こういったことがあってもいいのかなと思います。またこの頃、呉越国が契丹に使者を派遣したりしています。

916年になると、耶律阿保機が皇帝を称します。耶律阿保機は907年にも皇帝を称しているんですが、1回目は遊牧民の部族の長としての即位で、916年は皇帝としてきちんと即位しなおしたんであろうと見られております。

917年になると、耶律阿保機が南への攻撃を始めます。また、遼東半島の付け根のあたりにある遼陽へなにかと出向くようになります。半島部では高麗が建国されている。この頃契丹は都の上京（じょうけい）を整備します。契丹が都を整備すると、各地から使者が派遣されるようになります。

契丹が都を整備して勢力を拡張しているような時期、契丹は遼陽故城というのを修築して、そこでさらって来た渤海人を住まわせて渤海戸を置くという記事があります。こうして、少しずつ契丹が渤海の方に来ている時期に、来日したのが裴瑋2回目となります。1回目は唐が滅びたあとの混乱を見計らって来日し、2回目は契丹の勢力が伸びつつあった頃に来日したということが指摘できます。翌年（920）入京して帰国します。

4 裴瑋の3回目の来日

921年になると、契丹が幽州を攻撃するなど、南

への攻撃を全体的に強めます。この頃ですが、渤海客を越前に安置するという日本の史料があります。これはたぶん前の渤海使で逃亡した人がいたので、そういう人を安置したのではないかと思います。そこまで関連性があるかは書かれていませんが、ひとまず『扶桑略記』などを見ると、渤海客を越前に安置したという記述がございます。

そしてこのあたりから、さらにいろいろ情勢が変わってきます。まず李存勖が皇帝を称して、後唐が成立します。五代十国の「五代」の2番目ですね。その勢いをもって南にいた後梁を滅亡させます。ここで五代十国の「五代」の1番目の後梁が滅亡するわけです。後唐は後梁以外にも岐（き）という李茂貞の国を滅ぼしたりします。

契丹はこの頃、西の方に攻撃を進めております。そしてその隙に、渤海は何をしたかという、契丹が支配していた国境線上にある遼州を攻撃しています。これがのちのちの渤海と契丹の対立の原因の一つであるかと思われます。この頃、裴瑋は、日本ではなく後唐へ使者として派遣されたということが、『冊府元龜』からわかっています。その後唐は、その頃南の方にあった前蜀という四川のあたりの国を滅ぼしております。こうすると後唐の領域がかなり大きくなったかということが見て取れるかと思います。そして後唐が南に注力して北を攻撃できないうちに、926年、契丹が渤海を滅ぼします。ただし渤海を攻略したあと耶律阿保機は、引き上げる途中で急病となって亡くなっております。

この頃には新羅の景哀王が宴会中に襲撃されて殺されるという事件が起きます。

渤海の跡地は東丹国として支配されていましたが、東丹国の南遷という事件が起きます。渤海の上京竜泉府のあたりにいた人々を、なるべく遼陽付近に移動させて、支配しやすくしようという動きが見られます。そしてこの東丹国の南遷という事件が起きた翌年（929）に来たのが、裴瑋の3度目の来日ということが言えます。これも因果関係としてとら

えるのはちょっと難しいかもしれません。東丹国が南遷したから裴瑋が来日した、ととらえるのはちょっと早計ではありますが、相関関係的に、東丹国が混乱している時に来たのが3度目と指摘できます。そして、翌年裴瑋が帰国する。この時、当時の契丹の皇帝と仲の良くなかった東丹王耶律倍が、後唐に亡命するという事件が起きます。

だいたい、ちょっと駆け足になってしまいましたが、裴瑋の1回目2回目3回目の来日というのは、こうした国際情勢の中でもたらされたものであると指摘することができます。

5 帯金具の系譜

さて、この国際情勢と帯金具をどう結びつけばいいのかということになります。穴太遺跡の帯金具は、契丹製の可能性も検討されていますが、私は契丹製の可能性は少ないと思っております。契丹は後唐を滅ぼすのに加勢しており、またのちのち後晋を滅ぼすことにも軍を率いております。こうした後唐や後晋を滅ぼした時などに、ヒトやモノを接収して引き上げている。そして、実際に契丹の工芸品にいいものが見られるようになるのは、こうした後唐・後晋の滅亡後であると指摘することができます。そうすると、これより前の穴太遺跡の帯金具は、ちょっと契丹製と考えるのは難しいと思われます。

穴太遺跡からは帯金具が出ておりますし、オンドルらしき遺構も出ております。クラスキノ故城の城壁を歩くと、外の方に土饅頭みたいなのが見えるんですが、それを一つ掘ると墓が出てきて、帯金具が出てきたりします。これは渤海よりはもう少しあとのもの、東夏（とうか）のものや女真のものと言われている。またウラジオストクとクラスキノ故城の間にあるアナニエフカ故城に行きますと、穴太遺跡に見られるようなオンドルの遺構が見られます。これも東夏国の遺跡といわれています。一応似たようなものは出ているということが指摘できますが、ただ、契丹のものではなさそうです。

内モンゴルのアルホルチン旗という所の裂縫山（れつほうざん）という山に、耶律羽之墓（やりつうしほ）があります。耶律羽之墓誌を見ると、「裂峰（れつほう）之陽（みなみ）」と書いてありまして、「裂峰」って何だろうってずっとわからなかったんですけども、行ってみると山が裂けているんです。で、現代も裂縫山、裂けて縫った山と書かれていて、ああ、たしかに墓誌の記述と合う。墓誌の記述が行って初めてわかったという事例の一つですが、そういう所に耶律羽之の墓があります。地下はもう埋め戻されていて覗くことはできませんが、報告書がいくつか出ております。墓誌を読むと、「渤海を収伏して東丹と革（あらた）む」というような記述が出てきます。そして、穴太遺跡と関連あると思われる帯金具がいくつか出てきております。ただしこれも、後唐を滅ぼして燕雲十六州を獲得したあとに埋葬されたと見た方がいいような年代であります。

涿州島の龍潭洞遺跡（岡田講演図8）と、穴太遺跡の帯金具の画像（岡田講演図5）を、透明度50%にして重ねると、すでに指摘がありましたが、概ね一致しますね。龍潭洞遺跡は契丹と結びつけにくい。穴太遺跡のものが契丹とつながるかという、たしかにこのように似たようなものは出てきているんですが、彰武県の朝陽溝遼墓という所から出てきた帯金具、赤峰市内で出てきた帯金具の一式と、新地郷英風溝7号墓から出てきた帯金具など、たしかに似ているのは出てきますが、おそらくは穴太遺跡の帯金具よりもあとに作られたものである。だから契丹から伝わったものが穴太遺跡にというのはちょっと考え難いというのが私の考えであります。

ここで一つ参考になるのは、小嶋先生の図7にも出てきたんですけども、唐家営子郷李家営子2号墓というお墓があります。これが遼ではなく唐代なんですね。ソグド系の人物が彫られた遺物なども出てきますので、ソグドとかもっと西の方との関係がある遺跡じゃないかということが近年指摘されています。ですので、穴太遺跡について考える場合、

小嶋先生のご報告でも示唆されていましたが、やはりもう少し西の方、あるいは唐とかそちらの方を考えてみた方が何かわかるかもしれないということは指摘できます。

帯金具の文様についてですが、宋の時代に作られた建築技法書の『营造法式』の図面に、いわゆる唐草文様というものをこうやって書けばいい、みたいな見本帳があります。いろいろ海石榴や牡丹などがあるんですけども、ざっと見た中では蓮華の葉の書き方に似てる。これだけで蓮華だとは言にくいんですけども、たとえば中央の花の部分は咲いている花というよりも閉じてる花ですよ。閉じてる花が描かれるのは、日が暮れると閉じて日中また開く蓮華が一応合致します。周りの蔓っていうのは閉じてくると丸まった葉っぱなのかなと。元々大きい丸い葉っぱが丸まったりしますので、そういうことをモチーフにしたものかと考えることもできなくもありません。この辺はもう少し事例を探してみないとわかりませんが、雲崗などに行きますと結構閉じた蓮華の文様などもあります。その辺との比較をしてみないと、ちょっと一概には言えませんが、少なくともここで指摘できるのは、契丹に見られる文様とは言い切れず、唐や宋に継承された描き方に類例が見られるということだけ指摘できると思います。

6 渤海の滅亡

先ほどの、裴瑋が後唐へ派遣された時の史料というのは、『冊府元龜』に残っています。渤海国王の大諲譔（だいいんせん）が裴瑋を遣わしたと。これだけで同一人物と言い切れるのかと言われると難しいところですが、概ね、日本へ来た裴瑋と後唐へ来た裴瑋というのは同じ人物であろうと思われております。

最後に、ではなぜ渤海は滅びたのかということですが、渤海の内紛で侵略を許したという見解があります。論拠は『遼史』耶律羽之伝の次の記述、

「先帝、彼（か）の離心により、豊（きん）に乗じて動く、故に戦わずして克つ」という記述です。先帝すなわち遼の太祖耶律阿保機が、彼の離心により間隙を縫って兵を動かしたため、戦わずして渤海を攻略したことを示すと、従来言われてきました。この「離心」というものが何かということを考えると、確かに渤海内の反乱や猛烈な内紛と見なすことはできます。但し鉄案ではないと思われます。それは、「群下離心」「諸部離心」「一軍離心」「億兆離心」「上下（しょうか）離心」という、『遼史』の他の場所に書かれた記述であります。基本的に『遼史』における「離心」というのは、皇帝に対しての離心、皇帝とその周辺勢力に対して反乱を起こしたと見た場合に「離心」と書かれる。おそらく耶律羽之伝もそういう意味で書いてあるだろうと思われます。

また、渤海で内紛がおきていたとみる説では、『高麗史』をとりあげて、渤海が滅亡する以前から、渤海人が高麗に來投していることを引きあいに出します。滅亡前から來投しているということは、すなわち内紛があったのであろう、と言うわけです。しかしこれも『高麗史』太祖本紀をよく読みますと、滅亡によって渤海人が來投したと認識した書かれ方がされています。また『高麗史節要』巻1にも、契丹の攻撃によって渤海人が來投したと書かれています。こうしたことを考えると、「彼の離心」というのは渤海の内乱という意味ではなく、渤海の契丹に対する心服しない態度を指していると考えられます。

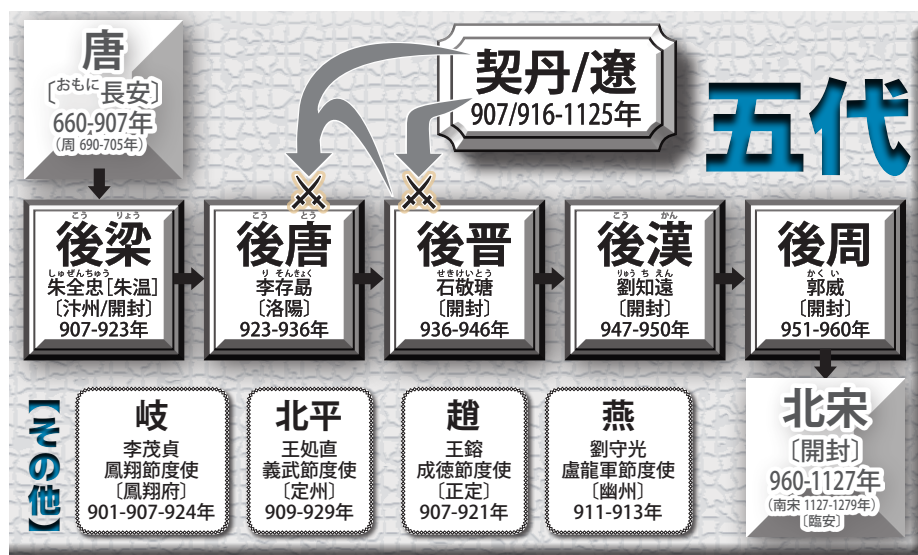
『遼史』耶律羽之伝に「豊に乗じて動く」——隙をついて攻撃したとありますが、これは契丹が渤海を正月に攻撃したわけで、そういう正月の油断した時期に攻撃したから勝ったんだということであって、渤海国内の混乱によって勝利したんだということとは指摘しにくい。以上をもつと、『遼史』の耶律羽之伝から渤海の内乱を想定することは、あまりおすすめできないということを指摘できます。

だいたい以上になります。今まで地図をコマ送り

のようにお見せしてきましたが、途中から契丹と渤海の対立というのが始まるわけですね。その対立の中で、隙をついて渤海は攻撃されて滅びたと認識した方がよくて、もちろん史料に書かれていない内乱というのはあったかもしれませんが、従来内乱があったという根拠とされている史料からは、渤海の

内乱を想定することはできないと、言い切っていいのではないかと思います。またこの辺、討論でご指摘いただければと思います。

最後に帯金具と離れましたが、報告は以上とさせていただきます。ありがとうございます。



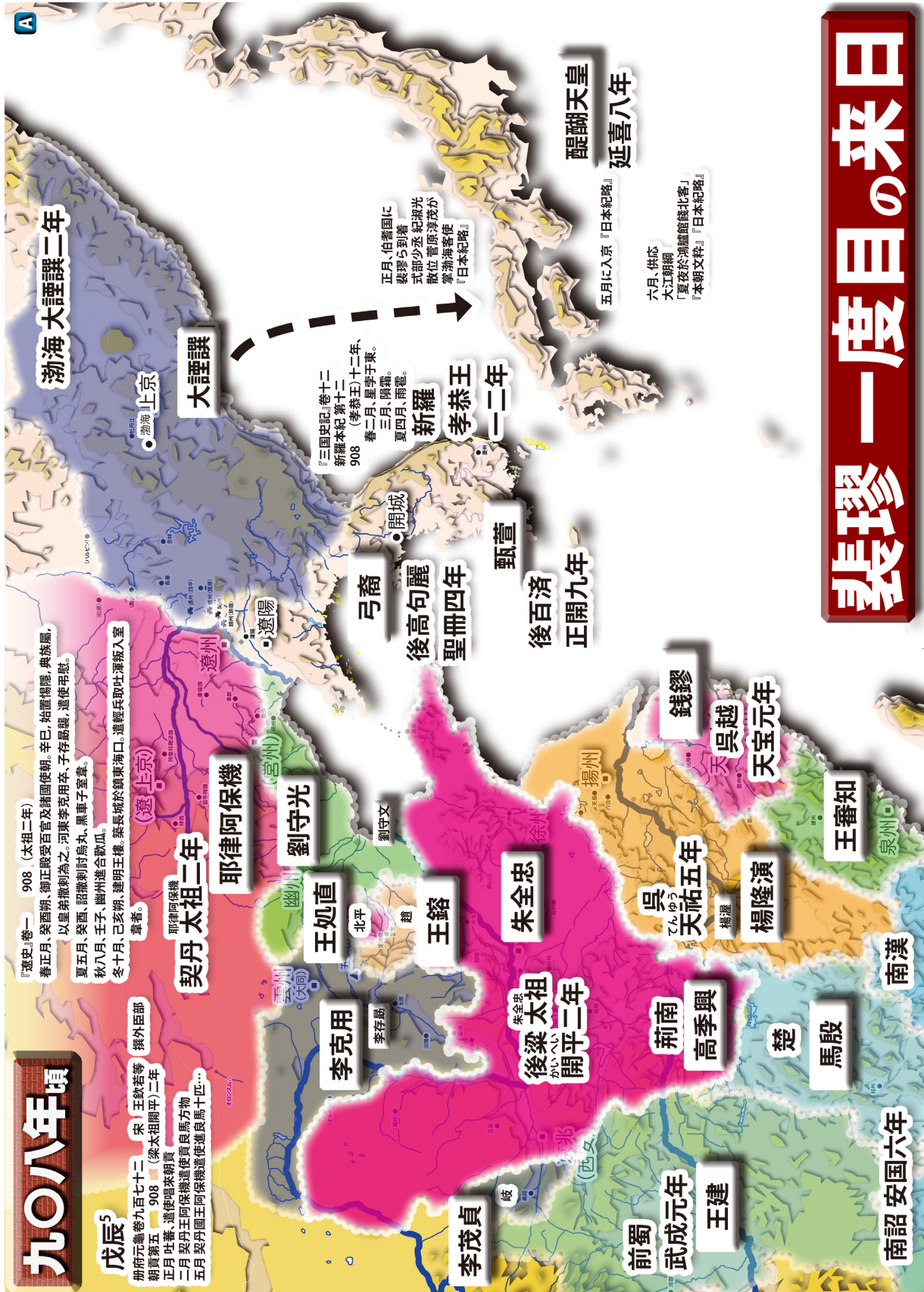


図1 裴瑒一度目の来日

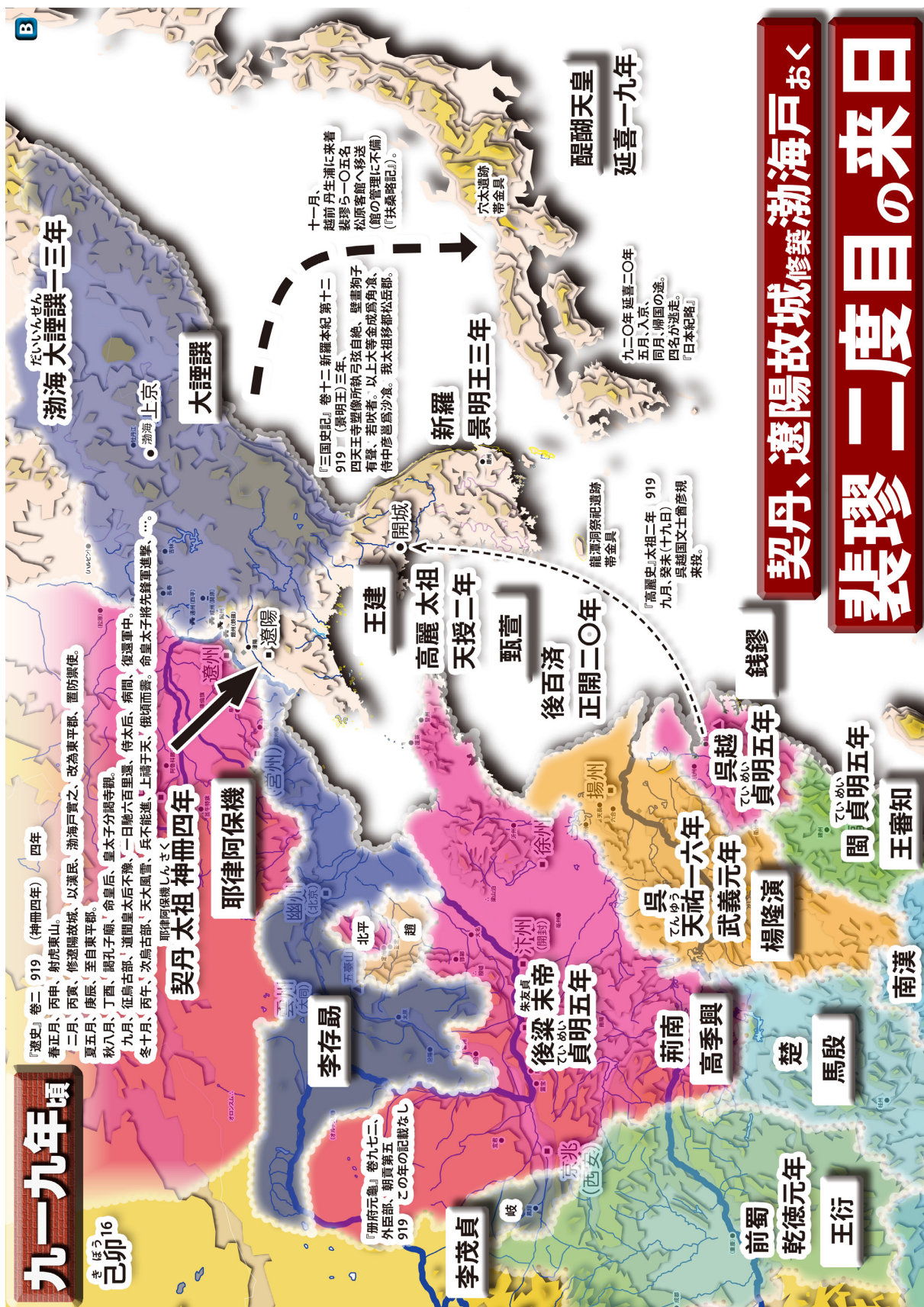


図2 裴璆二度目の来日



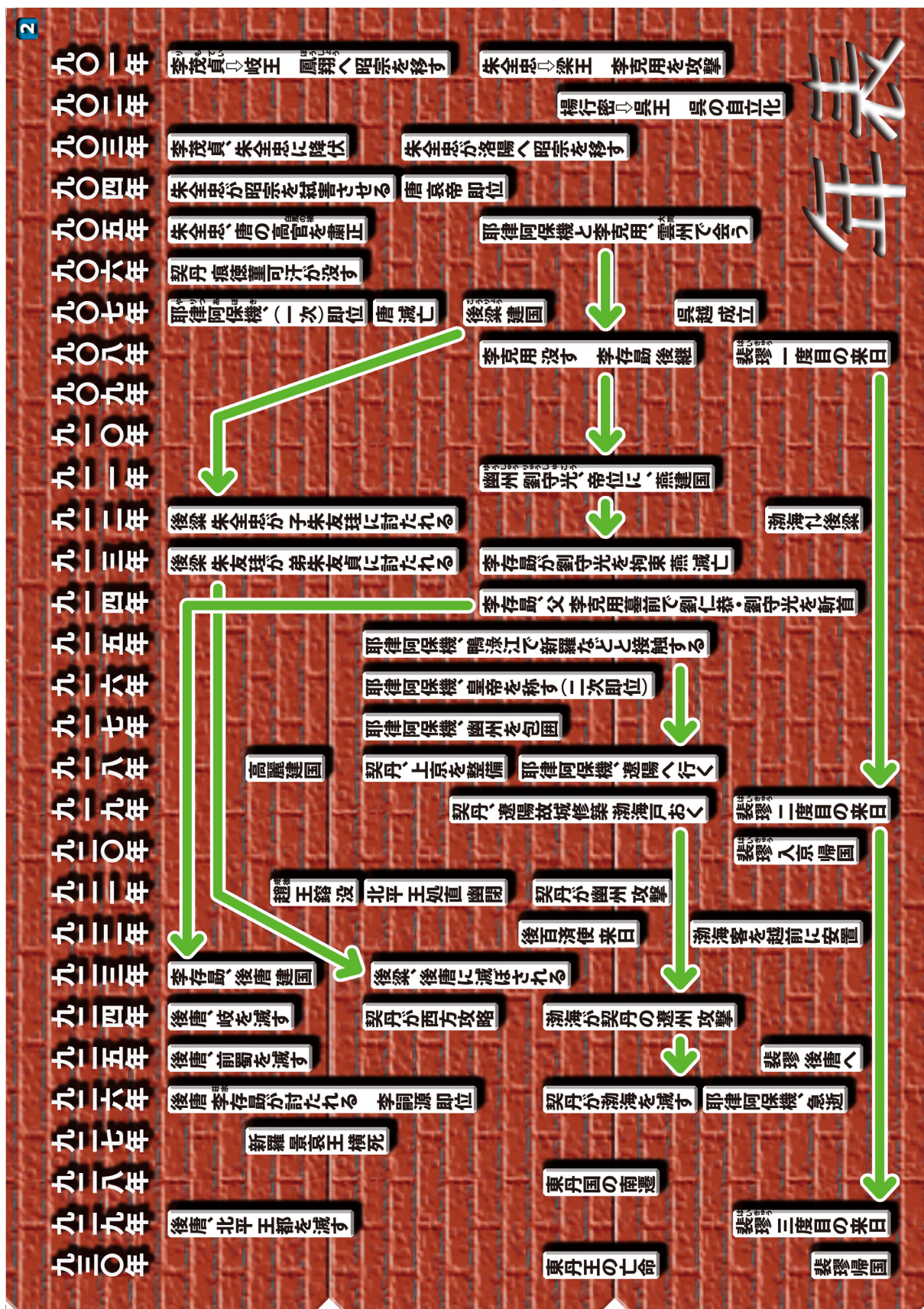


図4 年表

横浜ユーラシア文化館紀要 第12号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 12

2024年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 TAKT-JAPAN株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332